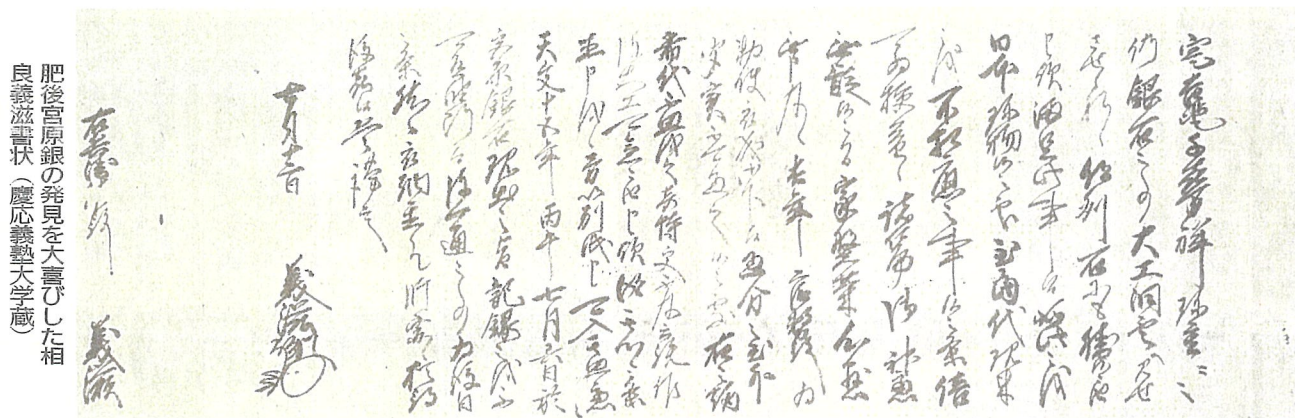




肥後宮原銀の発見を大喜びした相良義滋書状（肥後義塾大学蔵）

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

相良義滋

相良氏は、鎌倉時代に肥後国吉原（熊本県人吉市）の地頭職となり、室町・戦国時代に肥後南部に勢力を拡大した戦国大名です。鎌倉時代から明治維新まで続いた相良家には、約1400点の古文書・古記録が伝わっていて、現在は肥後義塾大が所蔵しています。

その中に、第16代当主の相良義滋が、17代の養子相良晴広宛てた興味深い書状があります。天文15（1546）年7月12日付のその書状で、何を伝えたのでしょうか。難解な古文書の主要部分を解説してみましよう。

「寔に吉兆、千喜万祥、珍重々々、よつて銀石の事、大江洞雲へ見せさせられ候、但州石にも勝り候の由申し候や、満

儀之奇特（特）」（世にも不思議・殊勝なこと）と捉えています。

16世紀半ばのこの時期、中国地方で石見銀山（島根県大田市）や但馬生野銀山（兵庫県朝来市）の発見と開発が進み、その鉱物資源を基に大内氏や山名氏が経済力を蓄えて勢力を拡大しつつあるとの情報は、九州の相良氏の元にも伝わっていたはずで

す。宮原の山中からも、「但州石（但馬生野の銀石）」にも勝り候」高品質の銀鉞脈が見つかったとの情報が、九州地方の諸大名間の覇権争いを優位に進めた義滋を歓喜させたのです。

義滋は、その「銀石現出」を「御・神慮」と位置づけ、「家繁栄の心懸け」に励むよう、晴広に伝えています。実は、この手紙の翌月、義滋は病で没しました。このことから、「当代に至りて現来」（自分の代に銀山を発見）したことを喜び、次代に相良家の繁栄を託したこの手紙は、一種の遺言ともいえます。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載

銀鉞脈を発見し、歓喜の手紙